

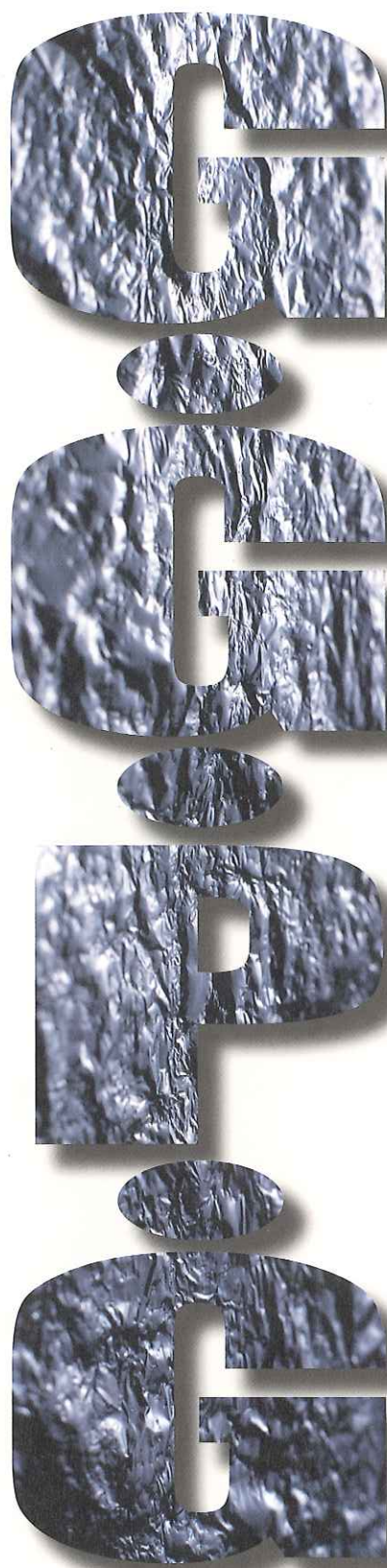
復刻版

GE・GJMGGJGAM・PRRR・GJMGEM

1924年6月〜1926年1月

ゲエ・ギムギガム・プルルル・ギムゲム

全10冊
別冊1



不二出版

築地小劇場が開場したその日、野川隆、橋本健吉（北園克衛）、玉村善之助ら若き詩人たちが、「既成文壇への挑戦」を掲げて、様々な「言語実験」をちりばめた詩雑誌を創刊した。

モダニズムの時代に一閃の輝きを放った伝説の雑誌、全冊を復刻！



体裁——B5判変形・並製・箱入・総二五二頁

解説——梅宮弘光・五十殿利治・澤正宏・西田勝

別冊——解説・総目次・索引

定価——本体揃価格三〇、〇〇〇円＋税

刊行——二〇〇七年七月

自足を唾棄し続けた前衛芸術雑誌がここに甦る！

「GGPG」の思い出

〔前略〕 野川の兄は新聞記者で江戸川乱歩を名乗っていた。ちょうど推理作家平井太朗氏の売出し中だったから、江戸川乱歩が天下に二人いたわけだが、野川は「オレの兄の方が本物である」と云っていた。しかし、当時その兄はハルビン方面へ去っていた。

私が隠田の横道の奥にあった方久斗画伯宅に野川を訪れた日、野川は私の服装におどろいたようであった。当時の文学少年や画学生は、よれよれのキモノを着ていたのに、私は、大島つむぎの袷に黄八丈の下着を着ていたからだ。

私を二階に招じ上げて、野川は数冊の数学書を持ちだして、「ごらんささい、こうして見ているだけでも抽象派ですね」と云った。「文学に物理学を持ち込んだのはイナガキタルホだ」と武田泰淳が言ったそうであるが、真相としてはその前に、野川隆がいるのである。〔後略〕

〔稲垣足穂全集・第十一巻〕筑摩書房（二〇〇二年刊）から引用

『G・G・P・G』発刊の経緯と誌名の由来

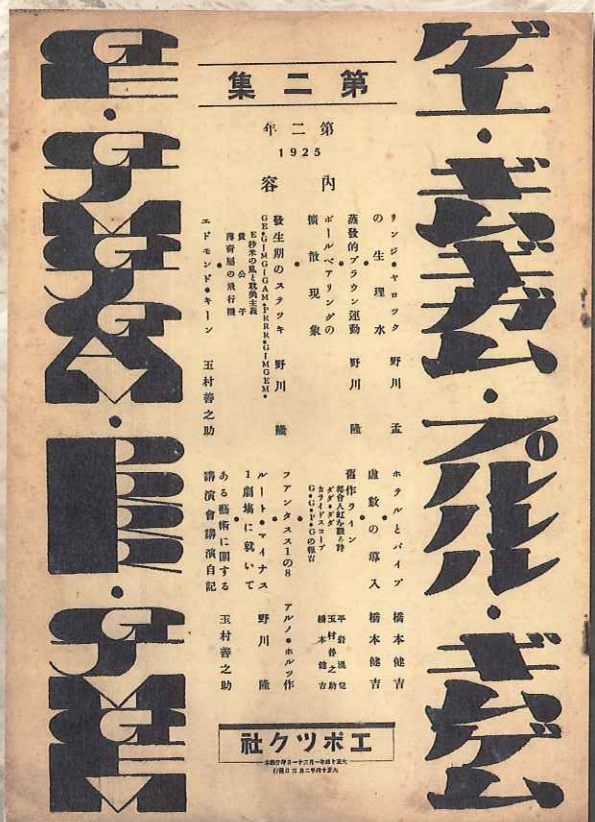
文芸美術雑誌「エポック」は何れ最近に再刊し度いと思つて居る——で、それまでの連絡をつけるために、「ゲエ・ギムギガム・プルル・ギムゲム」を出すことにした。「エポック」では、しきりに海外の新芸術の紹介に努めたが、これでは、それをしないで、創作ばかりを発表する。

「ゲエ・ギムギガム・プルル・ギムゲム」は「エポック」を送呈してゐたところや、その読者だった人たちに送ることにした。非売品である。若し欲しい人があつたらさう云つて貰ひ度い。だが、不定期発行だから、一ヶ月に三度るときもあるだらうし、三ヶ月に一度の場合もあるだらう。

「エポック」が再刊されても、併し、この「ゲエ・ギムギガム・プルル・ギムゲム」は、このまゝ、継続して発行しようと思つて居る。此の名前に就いて直きに意味を聞きたがる人があるが、そんな必要はない。（少なくとも私一個の解釈に依れば、）音楽的な感覚でわかつて呉れ、ば可い。（蛇足を付け加へるならば、）都会の街々を動く、機械で出来た人間的な動物人形には、Gの発音の振動数と波形が気に入つたのである。

【ノガワ・リユウ】 〈創刊号の裏表紙裏からの引用〉

G・G・P・Gは追撃戦にうつりませう。



「マヴォ」に匹敵する文芸雑誌 待望の復刻！

五十殿利治（筑波大学教授）

関東大震災後、海外事情に通じた画家有島生馬はこの災禍を経験してようやく日本でも、第一次世界大戦後のヨーロッパで伝統破壊的な新芸術が頭をもたげる状況が理解できるようになったと指摘した。実際には、すでに震災前から破壊的な芸術は胎動を始めていたのだが、加速されたことは疑いない。村山知義の「マヴォ」と同じように、呪文のごとき挑発的な題名を掲げたこの「G・G・P・G」誌はまさにそうした傾向の代表であった。美術史の視点からみれば、同誌では、たとえば日本画家という枠を軽々と超えて、芸術的な脱皮と逸脱を続けた玉村善之助と、欧米留学で最新医学を学び、

科学的な認識に立脚した絵画を描いた中原實が遭遇する、すこぶる振幅の広い表現空間が実現した。「マヴォ」がひたすら暴力的で自滅的であったとすれば、「G・G・P・G」の誌面はむしろ禁欲的でさえあるが、芸術についてより高度に戦略的であった。今回の復刻は震災後の文化的ダイナミズムを解明する重要な資料を提供することになるだろう。

「おむか・としはる」

推薦の言葉……

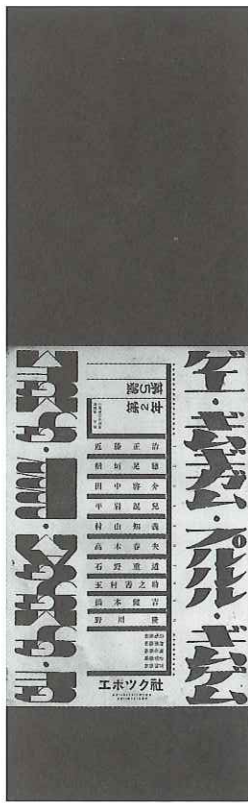
『ゲエ・ギムギガム・プルル・ギムゲム』における言語実験の可能性

澤 正宏（福島大学教授）

一九二〇年代中頃（大正時代末期）の日本の前衛的な芸術、文学の表現世界では、未来主義、立体主義、表現主義、ダダイズム、構成主義、それにアナーキズム、ニヒリズムなどの欧米からもたらされた芸術思想や哲学思想が渦巻いていたが、とりわけ関東大震災直後になると、天災による都市の破壊とそこから現代都市の復興とが、この渦巻きを加速させ、芸術、文学における表現は独自で個人的なものになっていった。「G・G・P・G」はこうした震災後の状況を背景に出現した詩誌であり、日本のダダイズムの詩が最もピ

クに達した一九二四年に創刊され、日本のシュールレアリスムの詩がスタートしようとした一九二六年一月に終刊したことの意味は大きく、この度の『G・G・P・G』の復刻は、一九二〇年代後半（昭和初年代前半）に隆盛を極めることになる、日本のモダニズム詩の表現の生成過程といった言語実験の可能性を開示するであろう。

「さわ・まさひろ」



『G・G・P・G』執筆者紹介（順不同）……

野川 隆 [1901～44] 本誌の編集人、及び名付け親。アナーキスト詩人、後にコミニスト詩人となる。著作に「屯の聖母」、「老頭児の詩」などがある。

橋本健吉（北園克衛） [1902～78] 本誌の編集人。日本を代表するモダニズム詩人。著書に「白アルバム」、「黒い火」などがある。

玉村善之助 [1893～1951] 本誌の発行人・編集人、日本画家、号は方久斗。1921年「高原会」を結成、「三科」を経て「単位三科」を結成し、前衛美術運動をすすめた。著書に「世の中」がある。

野川 孟 [1895～1976] ジャーナリスト。野川隆の兄。『エポック』の編集・発行人。同誌上に初代の「江戸川乱歩」として作品を発表していた。

稲垣足穂 [1900～77] 独自の視点から天体、飛行、少年愛、幻想などをテーマに作品を発表した。著作に「稲垣足穂全集」などがある。

村山知義 [1901～77] 1920年代新興美術運動の中心人物。「マヴォ」結成に参加。著書に「村山知義戯曲集」などがある。

宇留河泰呂（宮崎辰親） [未詳～1986] 美術家。玉村とともに「単位三科」結成に参加。戦前戦後を通してデザイナーとして活躍。

山越邦彦 [1900～80] 建築家。東京帝国大学建築学科卒業後、1920年代はダダリスト、30年代はモダニズム思想の論客であった。後に大学教授を務めた。

中原 実 [1883～1990] 美術家。玉村の友人で「単位三科」の結成に参加。北園の心友で戦後は歯科医師会会長になった。

近藤正治 [生没未詳] 詩人。その後『文芸耽美』等に作品を発表。

平岩混児 [生没未詳] 詩人。足穂の神戸の旧友。

田中啓介 [生没未詳] 詩人。足穂の友人でその後『文芸耽美』等に作品を発表。

石野重道 [生没未詳] 作家。足穂の盟友、佐藤春夫門下生。著作に「色彩のある夢」、「真珠貝の歌」などがある。

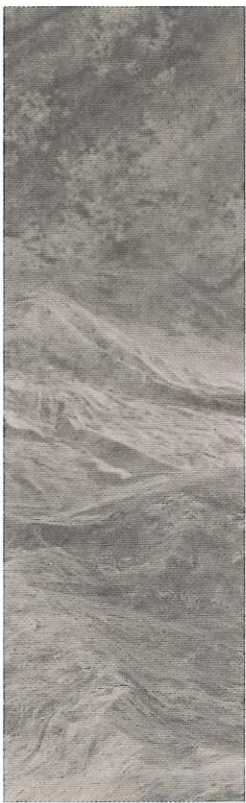
河本正義 [生没未詳] 詩人。その後『文芸耽美』に作品を発表。

武川哲郎 [生没未詳] 作家。著書に「左門旅日記」がある。

坂本 謹 [生没未詳] 詩人。足穂の友人、その後、佐藤惣之助主宰の『詩の家』等に作品を発表。

高木春夫 [生没未詳] 詩人。

栗原孝太郎 [生没未詳] 詩人。



『ゲエ・ギムギガム・プルルル・ギムゲム』

復刻版概要

GE・GJMGJGAM・PRRR・GJMGEM

原本 第1年第1集（1924年6月）～第3年第1号（1926年1月）
編集人＝玉村善之助・橋本健吉・野川 隆 発行所＝エポック社

冊数 全10冊＋別冊1

体裁 B5判変形（198×273mm）・並製・箱入・総252頁

解説 梅宮弘光（神戸大学准教授）・五十殿利治（筑波大学教授）
澤 正宏（福島大学教授）・西田 勝（文芸評論家）

別冊 解説・総目次・索引
別冊のみ分売可＝本体1,000円＋税
ISBN978-4-8350-6086-6

原本提供 山越邦彦研究会・多摩美術大学図書館 北園克衛文庫

揃定価 本体価格30,000円＋税
ISBN978-4-8350-6085-9

推薦 五十殿利治・澤 正宏



関連図書〈復刻版〉のご案内
近刊図書

エポック 全五冊・別冊一〔復刻版〕
二〇〇七年十一月刊行予定

築地小劇場（一九二四～三〇年）

全六三冊・別冊一・付録一
体裁 A5判・箱入・総約四、〇〇〇頁
付録 ポスター四枚・プログラム七五枚
解説 祖父江昭二
別冊 解説・総目次・索引
定価 本体揃価格八七、〇〇〇円＋税

鵬・ピオネ・藝術前衛

全二巻・別冊一（一九二四～三〇年）
体裁 菊判・上製・総八八六頁
解説 赤塚正幸・麻生久・出海溪也
別冊 解説・総目次・索引
定価 本体揃価格三五、〇〇〇円＋税

不二出版

▶〒113-0023 ▶東京都文京区向丘 1-2-12
▶TEL 03-3812-4433 ▶FAX 03-3812-4464
▶振替 00160-2-94084